
バカとテストとフラスコ計画

勦b

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

バカとテストとフランスコ計画

【Nコード】

N8096Z

【作者名】

勳b

【あらすじ】

彼女、安心院なじみは思いついた。

「試験召喚システムを使ってフランスコ計画を再開しよう」

そんな彼女の思い付きに振り回された少年、羽川駿河は安心院さんの悪戯でFクラスに所属することに！？

さらには、Fクラスには過負荷マイナスな奴等も沢山いて

バカと過負荷マイナスに囲まれた駿河の行動とは

めだかの主要キャラは全員同級生という設定です

ブローグ〜第二問〜(前書き)

不定期更新です

プロローグ〈第一問〉

「やあ、駿河」

「……………何の用だ」

「荒れてるね、そんな駿河も格好いいぜ」

「用件を言え」

「連れないねー、でも、そんな駿河を愛してるぜ」

「……………」

「睨むなよ、駿河に睨まれたら恥ずかしいだろ」

「用件は何だ」

「そんなにも聞きたいのかい？」

「……………」

「なあ駿河、進路を考えてないなら、僕と一緒に文月学園に来ないかい？」

「文月学園……………？」

「ああ、そつだ」

「目的は何だ」

「フラスコ計画さ」

「……諦めたんじゃないのか」

「また目指すことにしたよ、今度はゆっくりと遊び半分だね」

「……ッ！まさか、試験召喚システムは」

「駿河の予想通り、僕が立案、作成した」

「……フラスコ計画のためにか？」

「いや、立案した時の僕は完全に遊びのつもりだったさ」

「……文月学園」

「ああ、僕と一緒に行くつぜ」

「断る……って言うたら」

「駿河を半殺しにしてでもYESと言わせるから、考えてない」

「……」

「それじゃ、僕は行くよ」

「そうかよ」

「じゃ、愛してるぜ駿河」

「愛さないでくれ、安心院あんしんいんさん」

「おいおい、違うだろ。駿河だけは、親しみと愛しさを込めてなじみと言っよう」

俺がここ、文月学園に入学してから二度目の春が訪れたよ。

……学園に行きたくないな

そう思いながらも、俺はゆっくりと校舎へと続く坂道を上る。

俺の周りにいる人は皆、自分が割り当てられるクラスに期待しているのか、皆何処かそわそわしている。

……いいよな

俺は溜め息を吐く。

俺は、自分が割り当てられるクラスを知っている。

……試験中にちょっとしたことをやっちゃったからね。

俺は再度溜め息を吐くと、坂道を上りきった。

「『駿河ちゃん』見つけた」

俺が坂道を上り切ると同時に後ろから声が聞こえた。

「球磨川……大丈夫か？」

そこには、去年の夏に一騒動起こした張本人、球磨川が息を切らしながら立っていた。

「『いやー』寝坊しちゃったから走ってきたんだよね」『新学年早々遅刻だなんて』括弧悪い真似はできないんだぜ」

「そう」

球磨川の話の流れしながら歩きだす。

球磨川はそんな俺の横に立つと歩きだした。

「今日は遅いな駿河、そして、これからもこの時間に来るようにしろよ球磨川」

「朝からテンションが上がらないし、仕方がないですよ」

「『学校は遅刻ギリギリで来る』それが楽しいんですよ」『鉄人先生！』」

「鉄人じゃないと何時も言っているだろう!!」

あだ名は鉄人じゃないですか。

「そんなどうでもいいことは捨てといてさ、なあ鉄人、外は寒いから早く封筒を寄越してよ」

「お前は先生の名前を何だと思ってるんだ!!……まあ、いい、受け取れ」

そう言っつて差し出された封筒を受け取る。

「『駿河ちゃん』と同じクラスがいいな』」

こつちから願ひ下げだ。

笑みを浮かべながら封筒を開ける球磨川を無視して俺は歩きだす。

「ん？封筒の中を確認しないのか？」

「知ってますから」

「……そうか」

鉄人は俺に近づき、肩を優しく叩く。

いや、あんたから見たら優しくかもしれないけど、俺から見たら痛いからね？

「駿河、お前が試験中にあんな行動をとった理由が俺にはわからない」

俺だつてわからないよ。

「お前の成績だつたらBクラス……いや、Aクラスにはいけないはずだ」

Aクラスに行きたかつたなー

鉄人が黙るとKY（球磨川）が近づきながら俺に言う。

「『僕はやっぱり』『Fクラスだったよ』『駿河ちゃんは』『Aクラス？』『それともBクラス？』」

「お前と同じだよ」

俺は再び歩きだす。

驚いた顔をしている球磨川に俺はもう一度言う。

「俺はFクラスだ」

羽川駿河

そのスキルからかつては『何でも知ってた少年』と言われた少年

そして、『彼女』に魅入られた少年

そんな駿河の物語が始まった

プロローグ（第一問）（後書き）

こんにちはーおはようです

普段はヤンデレ書いてます

この作品でもヤンデレ書くつもりです

PS他の作品もよろしく

ブローグ〜第二問〜（前書き）

バカテスト「化学」

第一問

問 以下の問いに答えなさい

「調理の為に火にかける鍋を製作する際、重量が軽いのでマグネシウムを材料に選んだのだが、調理を始めると問題が発生した。この時の問題点とマグネシウムの代わりに用いるべき金属合金の例を一つ挙げなさい」

土屋康太の答え

「問題点……………ガス代を払っていなかったこと」

教師のコメント

そこは問題じゃありません

吉井明久の答え

「合金の例……………未来合金） すごく強い）」

教師のコメント

すごく強いと言われても

球磨川楔の答え

「問題点……………」『姫路さんに料理をさせたこと』」

羽川駿河の答え

「合金の例……………」姫路さんの手に掛ければどんな合金だって無意味さ。オリハルコンだろうとガンダニウム合金だろうとね」

教師のコメント

先ほど姫路さんがいい笑顔で君たちの方に向かって行きましたよ

プロローグ〜第二問〜

「『いやー』『駿河ちゃんと僕が本当に』『同じクラスだったなんて思いもしなかったよ』」

「そうだねえ」

てきとくに球磨川に返事をしながら廊下を歩いてると、球磨川は足を止める。

「『うわー』『凄くデカイ教室だ』」

確かにデカイね。

通常の教室より5倍ぐらいかな？

「ここがAクラスだね」

「うむ、ここはAクラスだ」

「!?!?」

「『!?!?』」

俺と球磨川が声が出た方……後ろを向く。

そこには扇子で口元を隠している彼女がいた。

「『やあ、めだかちゃん』『おはよう』」

「おはよう、めだかちゃん」

「おはよう、球磨川、駿河」

彼女 黒神めだかに挨拶をする。

朝から面倒な人と会っちゃったよ。
早く立ち去るとしよう。

「『めだかちゃんはやっぱり』 Aクラス代表なのかい」

……めだかちゃんの相手は球磨川に任せよう。

「何処に行こうというのだ駿河」

「やだなー、自分のクラスに決まってるじゃないか」

めだかちゃんは俺の方に自分の手を載せながら言う。

「駿河……貴様はFクラスだな」

「ああ、よく知ってるね」

めだかちゃんとは振り分け試験を行った教室が違うはずなんだけ
ど……

「なに、貴様の行動を私が知らないはずがないだろ」

……怖いこと言わないでくれよ。

「駿河、貴様の行動を私は責めないぞ」

それだけ言うともだかちゃんは俺から離れる。

「貴様と同じクラスになれなかったのは残念だが、仕方がない」

めだかちゃんは自身の教室 Aクラスに入っていた。

Aクラスか

関わりたくないな。

「『駿河ちゃん！』 『めだかちゃんが僕を無視したよ！』」

「……そうだな」

無視は堪えたのか、球磨川は涙目になりながら俺に訴えてきた。

面倒だなー

「ほら、早くFクラスに行くぞ」

「『駿河ちゃんも』 『僕に冷たい！？』」

お前の相手は面倒なんだよ。

俺と球磨川は二年F組と書かれたプレートのある教室を見る。

「『……………』 駿河ちゃん」

「言っな」

「『ちよつとAクラスに』 『遊びに行ってくるね』」

「止めるんだ、いや、止めてほしくないけど面倒だから止めてくれ」

螺旋を両手に持った球磨川の襟首を掴んで球磨川を止める。

……………よし、入るか

俺はドアを開ける。

「おはよう……………あれ？ 何やってるんだい坂本君」

「ん？ 駿河じゃないか、お前の嫁が待ってるぞ」

嫁？

俺には画面の中にも外にも嫁なんて

「駿河くん！！」

とたとたと小走りで彼女は俺に近づくと俺の両手を手に取る。

「駿河くんがFクラスなのは驚いたけど、これもきつと神様が私

達を同じクラスにしてくれたんだよね」

「江迎!？」

彼女 江迎怒江は俺の手を上下に激しく振りながら言う。

「これからは毎日駿河くんと会えるね!

私からしたら毎日じゃなくて何時もがいいんだけど、それは望みすぎだよな。

駿河くんと毎日会えるだけでも幸せすぎるんだよな!

でも、いずれは、何時でも一緒にいられる仲になるんだから、その予行練習と思えばいいんだよな」

「なあ、江迎 俺の手が腐ってるんだけど、君のスキルが照れて発動してるんだけど!！」

「あっ!！」

江迎は慌てて俺の手を離すとシュンと落ち込む。

……あー

「ほら、江迎はまだスキルのON/OFFに慣れてないから仕方がないよ。これからゆっくり慣れてけばいいさ」

それを聞き江迎は嬉しそうな笑みを浮かべた。

……まあ、悲しい顔をさせるよりもマシかな。

「『相変わらず』『江迎ちゃんと駿河ちゃんは』『最高のカップ

ルだね』」

「球磨川！ 居たのか！？」

「『坂本くん！？それは流石に』 『酷いんじゃないかな！？』」
そりゃ、お前は『自分の気配をなかつたことにした』んだから仕方がないだろ。

「坂本君、席は決まってるのかい？」

「いや、席は自由だぞ……お前以外はな」

「駿河くんは私の隣だよね。」

私の隣以外選ぶはずが無いよね」

「はははッ、そのようだね」

俺は江迎ちゃんの席の隣に座った。

席って言うっても、椅子がないから床に座るしかないんだよねー

教室として可笑しくないかい？

「『ねえねえ、坂本くん』 『何で坂本くんが教壇に立ってるの？』」

球磨川の言うとおり、坂本君は教壇に立ちながら俺達Fクラスのメンバー（もうすぐHRというのに半分も集まってない）を見渡していた。

「俺はこのクラスの最高成績者だからな」

「『駿河ちゃんじゃないの?』」

「俺は振り分け試験を受けてないからね、0点なんだよ」

「つか、受けてたらこのクラスにいないし。」

「江迎ちゃん」

俺は小声で隣……肩が触れ合うぐらい隣にいる江迎ちゃんに言う。

近いよね、近すぎるよね!

「HRが始まるまで寝てるから、始まったら起こしてくれないかい?」

「うん、任せて!」

俺はそれを聞いて横になる。

すると、江迎ちゃんがそわそわしだす。

「わ、私好きな人に膝枕するの初めてかな」

「しなくていいからね」

ブログ〜第二問〜（後書き）

こんにちはーおはよう

羽川駿河は私が書いている『めだかボックス〜何でも知ってた少年〜』の主人公でもあります

PS 球磨川の『』のつけどころがいまいちわかりません（笑）

安心院さんのよくわかるスキル対策〜駿河編〜(前書き)

何でも知ってた少年のネタバレもあります

安心院さんのよくわかるスキル対策〜駿河編〜

羽川駿河

スキル「全知全脳」オールニュー

「愛つり人形」ワンサイドバベット

まずは、僕の彼氏の紹介だ。

全知全脳オールニューは駿河がはじめから持ってた異常ブラスのスキルさ。

僕はこのスキル目当てで駿河に近寄っただけで、詳しいことは違う連載で書いてるんじゃないかな？

このスキルは駿河の口癖である「知ってた」でわかるとおり、未来予知系のスキルさ。

でも、そんじょそこらの未来予知とは強さが違う。

なんせ、全てのことを知るからね。

それこそ、そこら辺にある木の始まりから終わりまでの成長を駿河は全て知っているんだ。

ただ、知っていても思い出さなきゃ意味が無い。

知ることと思い出すことは別問題なんだぜ。

今は、僕がスキルの力を弱めて「興味があること」に限定して知ることになっているよ。

つまり、駿河は僕のことを何でも知ってる……とは限らないんだぜ。

駿河は僕やめだかちゃん、さらには球磨川くんと言った強い力を持つ……駿河いわく、運命を簡単に変えられちゃう奴らのことを知ってもは当てにならないらしいよ。

まあ、僕の全ては時間を掛けてゆっくりと教え込ませてあげるから安心してね（安心院さんだけに）

次のスキル、愛つり人形コンサイドバスターは駿河の過負荷のスキルだ。

中学時代のいざこざで駿河は心に深い傷を負ってしまい、オール全知全脳ユを失い、このスキルを得たんだ。

中学時代の駿河は僕がいなければ自殺でもしてたんじゃないかな？

最も僕がいなければ駿河の中学時代は平々凡々たるものだったんだけどね。

このスキルは自体は驚異に値しないから安心するといい。

このスキルは駿河の意志に関係なく発動するスキルだよ。

このスキルが発動すると、駿河は体の自由を第二者に奪われるんだ。

第三者つうのは、駿河を愛している者

つまり、僕だ

まあ、僕以外にもいるんだけどね。

邪魔な女が多くて困るよ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8096z/>

バカとテストとフラスコ計画

2012年1月7日00時49分発行